

日本におけるホームスクールの可能性と課題

— ホームスクールの一事例を通じて —

吉 井 健 治

要 約

ホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわるというものである。

本論文は、小学生のきょうだいのホームスクール事例を提示して、ホームスクールの実際の様子とこれに至った経緯、また学校教師の見解について記述した。そして、日本におけるホームスクールの教育臨床的課題として、自己を基点とした生き方の追求、学習の問題、社会性の獲得に関する問題の3点について検討した。

はじめに

ホームスクールとは、学校よりも家庭や地域をベースに子どもの教育を行うものであり、主としてアメリカで子どもに対する親の教育の権利と自由を求めらる中で展開されてきた教育形態である。わが国ではホームスクールという言葉さえまだ一般には知られていないが、ここ数年、小・中学校への登校を本人の自己選択とし、家庭や地域を拠点に子どもの教育を行う家族がみられるようになってきた。

わが国の場合、不登校生徒及び高校中途退学者は年々増加しており、学校教育からの子どもの離脱現象がすすんでいる。ところが、この問題への対応においては学校教育の内部における対策が強化されるばかりで、学校教育そのものの存在価値や学校外教育の可能性についての論議は少ない。この背景

には、学校教育の万能性が期待され、同時に高い責任性が付与されるという、いわば学校信仰あるいは学校絶対視があると考えられる。わが国のこの特異的な状況において、ホームスクールの概念と実践は、これまで当然視してきた学校教育の制度や場への再考を迫るものである。たとえば、学校は子どもの成長のために本当に有効な教育の場となっているのか、また教師の専門性は子どもにとって本当に有益なのか等、根本的な問いかけがなされる。

こうした学校教育への問題提起のみならず、むしろそれ以上に、ホームスクールの意義は、家庭や地域における教育観、教育資源、教育力についての再検討にある。つまり家庭や地域は、学校依存から脱却して、子どもの教育において主体性を発揮することが求められるのである。

以上のことから、ホームスクールは、家族単位のささやかな教育実践であるにもかかわらず、従来の子どもの教育のあり方を覆すほどのパワーを秘めているといえよう。

そこで本論文では、まずホームスクールの概略を述べた上で、筆者が関わったホームスクールの一事例を提示する。本事例を通じて、ホームスクールの状況が具体的に示されるとともに、学校教師の見解からはホームスクールによって学校が突き動かされている様子を知ることができる。最後に、今後ホームスクールがわが国に取り入れられていく際の教育臨床的課題について検討したい。

1 ホームスクールとは何か

ホームスクール(Homeschool)という用語は、これに類する「ホームスクーリング (Homeschooling)」、「ホーム・ベースド・エデュケーション (Home-based Education)」(Education Otherwise、1996)とは社会文化的及び概念的に意味の違いはあるが、いずれにせよ本質的に共通するのは、学校教育への参加を一つの選択肢とみなして、主として家庭や地域の中で子どもの生活と学習を支援していくというものである。

ホームスクールの定義は、その長い歴史をもつアメリカでは、「親が子ども

を学校へ通わせず家庭で自ら教育し、それが就学形態の一つとして認められているものである」(Mayberry, M., Knowles, J.G., Ray, B.& Marlow, S., 1995)とされている。また、わが国の代表的なホームスクールの実践者である久貝(1998)は、「学校に頼らないで、家庭や生活それを取り巻く社会から、子ども自身が自然に主体的に学び成長していくのを、寄り添う大人がサポートしていく、古くて新しい共育の方法」と述べている。

上記の「学校へ通わせず」及び「学校に頼らないで」という文言は、子どもの意志に反して親が登校を禁止するという意味でないことは勿論のことである。つまり、子どもの要求に応じて学校行事等に参加する可能性を含むのである。また、「就学形態の一つとして認められている」というのは、現在ではアメリカの全ての州で法的に認められ、同時に社会的認知を得ているところからきている。

したがってホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわるというものである。それは当然ながら、登校禁止、家庭内隔離、無責任、放任でないことは明らかである。

なお、不登校とホームスクールは状態像としては区別が曖昧な場合があるが、これらの主要な差異は学校信仰の有無にある。すなわち、不登校においては「学校に行かなければならない」という強迫的な意識が顕在的あるいは潜在的に認められるが、ホームスクールではその意識があまりみられない。そのためホームスクールでは、登校しないことからくる罪悪感、劣等感、自己否定感は弱いのである。また、怠学型及び無気力型の不登校と違って、ホームスクールの子どもは自由な興味・関心で主体的に行動している。

2 ホームスクールの現状

(1) アメリカのホームスクール

アメリカのホームスクールについて、江澤(1997)、泰(1997、1999)、Mayberry, M.他(1995)、本図(1995)、武内(1997)を主な基礎資料として、

概略を簡単に整理する。

①現在の人数：ホームスクールの子どもの人数は、いくつかの理由から正確な把握は困難であるが、全米ホームスクール研究所(National Home Education Research Institute; NHERI)の調査では、150万人とされている(ニューズウィーク日本版、1998年10月14日号)。

②歴史的経緯：ホームスクールの歴史は、1960年代後半から1970年代の前半に、ジョン・ホルト(Holt, J)らによって、公教育に対する異議が唱えられたことから始まった。また別な背景として、親が子どもを教育するのは聖書の教えであり信教の自由であるとする宗教的論理も、ホームスクールの展開に影響を及ぼした。そして1970年代、ホームスクールが一般に知られるにつれて様々な批判を受けるようになり、たとえば親の怠慢、無責任、破壊的活動等と評され、訴訟問題が続出した。しかし1980年代半ばからは、ホームスクールの親と教師・校長・教育委員会との協力関係が求められるようになり、ついには1993年までに全州でホームスクールは合法と認められるようになった。以上のように、ホームスクールは、公教育のあり方を批判し、対立拮抗した活動を展開してきたが、その後は法的に認められた上で公教育との相互協力を行うという経緯を辿ってきたのである。

③法的根拠：大久保(1998)は、アメリカにおけるホームスクールの法的問題の要点を、「親が自分の子どもを自己の信念に基づいて教育することを、権利として認識する点は、合衆国最高裁も否定するものではない。したがって、家庭において公教育に参加することなく子どもを教育することは、親の権利であり、それに対する様々な規制は、極力排除されるべきである」とまとめている。

公認されたホームスクールの形態は、私立学校と同じ地位が認められる場合(自宅に一つの私立学校を設立するという意味で)、学校教育(就学義務)の例外として特例的に認める場合、特別の法的措置が講じられる場合、の3タイプがある。

④実施条件：ホームスクールを行う際の条件は、各州によって異なるのだ

が列挙するならば、親の適格性、学校に準じたカリキュラム、教科書・教材の使用、学習・行動記録の提出、学力テストの受験等がある。

⑤選択理由：ホームスクールの親を対象にした調査研究(Mayberry, M.他 1995)からは、親がホームスクールを選んだ理由として「親子関係の緊密化」と「教育は親によってなされるべき」の項目が最も多いことが明らかにされ、またホームスクールの親は専門教師による集団教育に異議を唱えるとともに公立学校に対する信頼がきわめて低いということが示された。

⑥支援団体：ジョン・ホルト (Holt, J 1981、1982、1983) の思想をもとに教育的論理からの推進を図る「ホルト協会 (Holt Association)」があり、1977年から機関誌『Growing Without Schooling』を発行している。また、1983年設立の「ホームスクール法的擁護協会 (Home School Legal Defense Association; HSLDA)」は、市民運動、法的問題、調査研究、教材販売等に力点をおき、機関誌『Teaching Home』を発行している。なお、何らかのホームスクール支援団体に所属している者は約7割で、所属を拒否する者は約1割という調査結果 (Mayberry, M.他、1995)がある。

(2) 日本のホームスクール

わが国のホームスクールの子どもの人数については、これまで調査がされていないので正確には把握できないが、東京シューレの代表者である奥地圭子氏は、2～3千人 (神戸新聞 2000年1月10日付) と推定している。それは、多く見積もっても、全国の不登校者数の2.3%にしか過ぎない。

ホームスクールの実際を知るには、久貝 (1996、1998) 等の当事者による報告資料や、ホームスクール推進団体の出版物 (東京シューレ編、1996) 等が参考になる。しかし、研究者や教育関係者による調査研究及び事例研究はみあたらず、今後の研究が期待される。

ホームスクール家族を組織としてまとめていく団体には、フリースクール等が主導する民間施設主導型ホームスクール団体と、当事者家族が緩やかに繋がって相互支援するセルフヘルプ型ホームスクール団体の二つのタイプに

分類できる。もちろん、これらの団体活動に全く登録しないでホームスクールを実践する家族もいる。

民間施設主導型ホームスクール団体の代表例である東京シューレ（1985年設立）は、1993年から「ホームシューレ」を開始し、530家族（1999年9月）が登録して、月刊の交流誌の発行、直接出会う交流会（月1回の交流会、全国各地での交流会、合宿等）、電話・手紙・インターネットによる日常的交流、等の活動を行っている。

他方、セルフヘルプ型ホームスクール団体の代表例である「ホームスクーリング・ネット姫路（HSN姫路）」は、1993年から活動が始まった。その会報には、「学校に行かないで育つ子どもと、その家族を援助し合うための自助グループで、各家庭の独自性を尊重しながら、ゆるやかにつながるネットワークづくりをしています。専門家に頼るのではなく、親たち大人の智慧や力をリソースとして分かち合います」と記されている。

わが国におけるホームスクールはまだ始まったばかりであり、今後どのような展開をみせるのかが注目される。

3 ホームスクールの事例

事例の提示の前に注意を喚起しておきたいことは、わが国の現状では子どもの不登校を契機にホームスクールを始める家族が多いが、本来ホームスクールは不登校のための救済として存在するのではないという点である。ホームスクールの主眼は、家庭や地域による子どもの教育にあり、積極的に学校に行かないで生きていく方法の追究なのである。

ここで提示するホームスクールの事例は、筆者が教育問題の会合に出席した時に出会い、その後約2年間不定期にかかわってきた例である。筆者は、本事例には個人心理治療（カウンセリング）面接の必要性はあまりないと判断し、地域支援活動の一環として日常的なサポートを行ってきた。

本家族は、熊本県の地方都市に住む母親（40歳代前半）、長男A君（現在、12歳、小学6年生）、長女Bさん（現在、11歳、小学5年生）の3人である。

ホームスクールを始めたのは、長男が小学4年生から、長女が小学3年生からである。

筆者は、子ども達と直接接する機会は少なかったが、母親とは子どもの理解の仕方、学校への対応、ホームスクールの実践上の問題、一般的な教育問題に関して、面会あるいは電話で話し合ってきた。

子ども達二人が所属する小学校はかなり小規模であり、また学校の先生方は当然ながらホームスクールには否定的な印象をもっていた。筆者は、学校訪問をして校長、担任等と話し合ったり、日常の電子メールのやりとりをしてきた。

本事例の記述は、こうしたかかわりから得られた情報をもとにしている。なお本事例の執筆内容については、母親からの了承と確認を得ている。

(1) ホームスクールの様子

①長男A君の様子

【生活、友人関係】 起床、食事は自分のペースですすめ、昼過ぎまでテレビゲーム等で過ごしている。午後3時頃から、遊びに出かけるための準備を始め、近所の4、5人の友達の帰宅を心待ちにしている。そして、夕方暗くなるまで、サッカー、野球、カードゲーム等をして遊ぶ毎日である。彼は、裸足が好きで、服の汚れも気にせず、楽しく精一杯遊んでいる。

近所の人々は彼が登校しないことをある程度は理解しているが、彼の元気に遊ぶ姿を見て、「どうしてこれで学校に行けないのだろう」と不思議がる人もいる。

【学習】 彼は友達との遊びに全エネルギーを集中させる毎日なので、今のところ教科学習に直結することにはあまり興味を示さない。母親は、彼の中では友達との遊びを通じて様々な学びが潜在的に起きており、将来それが教科学習への取り組みを導いていくのだと考えている。また、自由な遊びこそが、学習に命を吹き込む作業であると言う。たとえば彼は、竹トンボに凝って飛ばし方を工夫したり、モンシロチョウを幼虫から成虫になるまで観察したり、

砂場遊びで偶然に砂鉄を発見したり等、自発的かつ発見的な学びをしているのである。

母親は、価値観や思想を子どもに伝えていくことは親の大事な仕事だと考え、たとえば環境問題等について子どもに語りかけていくのである。その時、子ども達は真剣なまなざしで聴き、積極的に疑問や意見を出してくる。

【学校への参加】 彼がひとりだけで登校することはほとんどない。妹が登校準備をするのを見て、自分も参加したいものがあれば登校する。彼は、運動等の自分が好きなことには積極的に参加するが、学習面では登校の際に強制的に勉強させられるのを嫌がっている。

②長女Bさんの様子

【生活、友人関係】 午前8時半頃に自分で起床し、朝食は自分で作って食べる。その後は、料理、編み物、読書、手紙書き、絵描き等、自分が好きなことをひとりで楽しんでいる。

友達と遊ぶことは少ないが、自分がしたいことをしているのであって、友達と遊ぶ時は楽しく元気に過ごしている。また、母親の教育上の関心から県内外に出かける時、彼女も付いて行くことがよくあり、そこに参加した子ども達と楽しく交流している。

【学習】 彼女は、教科書や問題集を見たり、自作テストを解いて自己採点したり、漢字の練習をしたりすることがあるが、母親はこうした学習よりも生活を通じての「真の学び」が大事だと言う。これは何を意味するのか、以下の3つのエピソードで示そう。

彼女は、母親と一緒に近所の図書館によく通うのだが、アメリカ旅行に行きたいといって英語の学習のための本を借りた。母親は彼女の本気さを知って、まずは自学自習のために電子辞書を買ってあげた。しかし、しばらくはひとりで取り組んでいたが、途中で投げ出してしまった。

彼女は、日頃からファッションに興味があって、「昔の人はどんな服を着ていたのだろう」「その時代の服の重さはどれくらいだろう」等の疑問をもち、

母親に‘歴史’の本が見たいと言ってきた。彼女は、一般の歴史の本にそれが描かれていると思いで図書館で探している。母親は、彼女が自分で‘ファッション史’の本を発見するのを待つことにした。

彼女は日頃から、外出時に紙と鉛筆を持参して駅名や地名等をメモしている。ところが筆順は無茶苦茶である。しかし母親は、本人が尋ねてこない限りは教えようとはしないのである。

このエピソードから分かるように、母親の教育方針は、子どもに対して強制したり過剰な期待をかけないで、むしろ安易に教えないこと、また子どもなりの試行錯誤と発見を徹底的に尊重すること、さらに多様な経験から本人が選択していくプロセスを重視すること、というものである。

こうした母親の対応によるところが大きいのが、彼女は自発性、創造性ある子どもであり、ユニークな創作活動を見せることがある。

【学校への参加】 学校へは、数日間登校しては数週間欠席するというパターンである。登校するのは、行事予定と時間割を見て、何らかの興味をもった場合である。そのときは前夜から服や道具を準備し、朝は自分で早起きして、服のおしゃれをして登校する。ただし、登校しても全ての授業に参加するのではない。たとえば家庭科等、自分の興味あることには参加するが、それ以外は図書館で読書等をしている。つまり彼女は、登校も学校での過ごし方も自分で選択するのである。

学校の勉強については、「国語の本の挿絵は、自分のイメージが壊されるから嫌い」、「～の勉強は嫌い。なぜ必要なのか分からない」等と不満を言うことが多い。また、宿題が出れば一応やるが、やり終えたらもう興味を失い、学校まで持って行かない。

(2) 学校から離れていった経緯

なぜ本家族はホームスクールを選択するに至ったのだろうか。そこには親の教育観や人生観が大きく関与していることは確かだが、やはり子ども達が学校に行かなくなったことがその選択の前提条件となっている。そこで、ホー

ムスクール以前の子ども達の小学校生活をみてみよう。

その前に注目すべきは、二人が通った幼稚園の特徴である。そこでは、自由保育及び統合教育の理念と実践が徹底されていた。またユニークな実践として、園児達が話し合いで決めること、イメージの豊かさを引き出すために文字指導はしないこと、身体障害を理解するために口や足を使って描くこと等が行われていた。そのため、このような幼稚園出身の子どもが、他の園の子どもと比べて、小学校入学直後に強い違和感をもつのは避けられない。当然、本事例の二人とも幼稚園と小学校のギャップにみまわれた。

①長男の小学校生活（入学から3年生まで）

入学直後から、「どうして制服を着なきゃいけないの。みんな同じ格好をしておかしいよ」、「規則は僕たちが決めたものじゃないのに」、「学校ってつまらない。じっと椅子にすわってお話ばかり聞いていなきゃいけない」、「今僕は国語はしたくないのに、国語の時間が来ちゃう」等と学校に対する不満を母親に語った。また同時に、様々な身体症状（微熱、腹痛等）を呈するようになった。しかし、母親が登校を促すので、彼は渋々登校を続けた。

ところが母親は、最初の授業参観で彼の絵を見て驚いた。幼稚園時代には大きく生き生きとした絵を描いていたのに、それは小さな青い滑り台を描いただけの寂しく悲しい雰囲気絵だったからだ。また学校での彼は、緊張でひきつった顔を見せ、おどおどしていた。家に帰ってからは黙って机に向かって宿題をして、外に遊びに行こうとしなくなった。こうした彼の様子を見て母親は、このまま強制的に登校を続けさせてよいものかどうか迷い始めた。

2年生の頃は、母親が登校への促しを弱めたので、時々休むようになった。3年生になって担任が替わってからは、一変して明るく元気に学校生活を送れるようになった。ただ、学校のあり方に対する不満や疑問は相変わらず続いていた。彼は、「僕は友だちも好き、担任の先生も好き。でも僕は学校が嫌い」と言っていた。

そして3年生の2学期頃、彼は、「1、2年生の時からずっと我慢して学校

へ行ってたけど、Bちゃん（妹）が学校に行かないと決めてから、僕ももう行かないと決めた。今の担任の先生のせいでもないし、今のクラスの友だちのせいでもないんだ」と語った。

②長女の小学校生活（入学から2年生まで）

彼女は小学校に通うのを楽しみにしていたが、入学して数日後には1年生の担任に不満や疑問をもつようになった。家で、「～しないとげんこつ百発だからしなくっちゃ」と口癖のように言うので、母親がわけを尋ねると、「先生がそう言うの。おたれるの嫌だからしなくちゃいけないの」と彼女は説明した。また、「先生は訳を聞こうともしないで、お友達をすぐ叩くの」と涙を流して訴えた。

1年生の2学期以降、彼女は担任の体罰を見て、ますます心の傷を深め、時々学校を休むようになった。母親は担任に事情を聞きに行き、申し入れをしたのだが、状況は変わらなかった。彼女は、「先生が怒るから、みんなは恐くてきちんとしているけど、恐いからいうことをきいたって何にもならない。何も分かってないということだもん」と言っていた。そして、身体症状（頭痛、腹痛等）を呈して欠席あるいは保健室登校の状態となった。彼女は、養護教諭には信頼を寄せており、「保健室に行くと、すぐ痛いのがなくなるんだよ。保健室の先生は優しい。ちゃんとお話を聞いてくれるもん」と言っていた。

2年生になって担任が替わったが、体調が悪くて登校はきつい様子だった。学校教師に対しては、「先生が気に入るようにしていなきゃいけないの。先生のために付き合わされてるの」、「先生達はいつも見張ってる。みんなが悪いことをしないかどうか」と不満を語っていた。友達との関係は、以前は帰宅後すぐに外出してよく遊んでいたが、2年生頃から誰とも遊ばなくなった。彼女は、「前はみんなやさしかった。でも、花びらが一枚一枚落ちるように、みんなの心からやさしさがなくなっていった。だから遊びたくなかったの」と寂しそうに語った。

そして2年生の2学期、彼女はランドセルを背負ったまま玄関でうつむき、

しくしくと泣いていた。母親はこの時、もうこれ以上無理して学校に行かせる必要はないと思った。彼女は、母親の許しもあって、学校に行かないことを決意した。

彼女は、「1年生になるのとっても楽しみにしていたんだ。ランドセルが届いた時、すごうれしかった。でもね、みーんな消えちゃった。みーんな消えちゃったの」とつぶやいた。

(3) ホームスクールへの転換

以上が学校に行かなくなった経緯であるが、通常の不登校と同じように引きこもり状態になった。つまり、周囲の人から学校に行っていないことでいろいろ言われたり不思議なまなざしを送られるのが嫌で、自由に外出できなくなった。外出時は町内を出るまで車の中で隠れたり、電話に出なかったり、ドアのノックの音を聞くとトイレに隠れたり等の行動をとった。このような引きこもり自体も、子ども達にとっては大きなストレスとなった。

母親は、子ども達が何か考え込んだ様子をしていると、「大丈夫だよ」と優しく支持する一方で、二人がバカ騒ぎしていると、「遊んでばかりいてどうするつもりなの」と怒ってしまい、心は揺れ動いた。また母親は、学校へ行かないことを容認したものの、小学校低学年で九九算や漢字等の基礎学力も身に付かなくて、今後どうなるのかと不安をもった。

こうしたなかで母親は、以前にも増して様々な教育書を読んだり、数人の著名な教育者、とくに武藤義男氏（当時、福島県三春町教育長）と手紙の交換をするようになった。そうして母親は、教育観、学校観、子ども観、家庭観等について再検討し、現在の信念を獲得していった。

同時に、親子とも登校へのこだわりは消えていった。登校へのこだわりの消失が結果的に再登校を導くという逆説的な現象があるが、この子ども達も再登校ができた。ただし、それは自己選択としての登校というかたちでだった。

この時期、子ども達の写真を撮る時、好きなポーズをとるように言ったと

ころ、二人ともピョンピョンと飛び跳ねた。これは、まさに希望の跳躍ともいうべきものであった。

こうして、本家族のホームスクールは出発したのである。なお二人は、クロンララ校（ミシガン州認可の私立学校）の日本事務局を通じて、当校の通信教育課程「Home Based Education Program」に登録している。

(4) 学校教師の見解

学校教師は、長男（A君）と長女（Bさん）の現状について、どのように見ているのだろうか。以下には、面接及び文書でのやりとりをもとに、二人の通う学校の教師4人（各担任、管理職、他の教師）の見解を箇条書きに示した。

【学校生活、選択登校】

- 二人は、登校したい時に登校し、帰りたい時に帰る。また、授業に関係なく、行きたい所に行き、やりたいことをやっている。
- 予定は時間割で知らせるので、A君が登校しないと全員が困るようなときだけ登校の催促の電話をしている。
- A君は、学校でやりたいことが終わると帰ろうとするので、いろいろと理由を付けて引き留め、放課後定時に下校させている。
- 全体で作業する時に参加しないA君の姿を見たとき、何とも言えない嫌な気分になったことがある。
- Bさんは、登校すると図書室に行って読書をして過ごし、気が向いたり関心のある活動の時だけ参加している。給食や掃除等の当番活動は普通に取組んでいる。
- 母親は二人が自立するための選択肢の一つとして学校があると言われるが、私たち教師から見ると二人の行動は、自由気まま、好き勝手、集団のかき混ぜに映る。
- 私は、二人のことを「きついことはしたがらない」、「自分の好きなことだけするために学校に来ている」といった見方をしている。けれども、二人

には学校に来なくても、自立した生き方ができるようになってくれるといいなと願っている。

【学習のあり方】

- 学校の教師としては、その時期その時期に学んでほしいことがあるし、積み重ねも必要だと思う。
- 学校の勉強を無理にでもさせた方がよいのか、させない方がよいのか迷うことが多々ある。お母さんに尋ねると「本人が決める」というが、結局は子どもは楽な方向に流れてしまうと思う。二人はきついこと嫌なことにまだ対応しきれず、逃げている状態だと思う。
- 小学校の基礎学力を十分習得して、その後自分の進みたい道を選んでも決して遅くはない。その方が、より幅広い中から選択できて、より自分にあった方向へ進めるのではないかと思う。
- まだ物事がよく分からない段階の子どもであっても、子ども自身の考えを主にして行動させ、体験させ、気づかせる中で育っていくものもあると思うが、学ぶべきことはきちんと教え、その上で考えさせ、好きなことをさせてもいいのではないかと思う。

【教師の葛藤】

- それなりに理解しているつもりだが、「このままでいいのだろうか」という思いは変わらない。
- 親の考えや対応が、子ども達の可能性をつぶしているように思えて仕方ない。
- 二人には二人の事情があるから、まるごと受けとめてやるべきなのかどうか迷う。他への迷惑はわかっているけど受け止めるべきかなのか。受けとめてあげたい気持もある。
- 子どもたちの将来への責任は誰がとるのか。
- 結局、お母さんの方針通りに、子ども達は動いているようなもの。
- 子ども達にとって大切な時期に、教師として何もできなかったことへの罪悪感はいつそう大きくなっていく。

- ・ Bさんはあまり話してくれないので本心は分からない。Bさんの期待に添えるような支援をしてあげられないのが残念だ。
- ・ 「迷い、怒り、諦め」のパターンの繰り返し。
- ・ どこまで声をかければよいか、その時その時で困っている。突き放した見方をしたり、見て見ぬふりをしたり、あきらめたりという気持の一方で、やはり子ども達のためには厳しく言った方がいいと思ったり、心の中は悶々としている。
- ・ 一般の不登校児と違うので、どう対応すればいいのか苦慮する。ひとつの育て方の違いと考え、見守っていればいいのかなとも思うが、子ども達が後で苦労するのではと思うと、どうにかしてやりたい気持で一杯だ。
- ・ 母親と話してみて、「学校って何だろう」「学校は何のためにあるのだろう」という疑問がわいてくる。

【その他】

- ・ 他の子たちにも、二人のように好きなことをしてみたいという気持は相当あると思う。他の子どもにそういうことを尋ねてみたい。
- ・ 他の子どもたちに二人のことをどんなふうに話したらいいのか迷う。

(5) 事例のまとめ

長男、長女は、小学校入学当初から学校のあり方や教師の対応に違和感をもったが、そこには親の教育観や自由保育から受けた経験が大きく影響していると考えられる。また長女の場合、担任教師の体罰を継続的に目撃したことが心的外傷となった。そして二人とも、学校ストレスや登校刺激によって、身体症状、自己否定感、ひきこもり等の二次的問題が起き、通常の不登校の様相を呈した。しかし、ホームスクールに転換することにより、親子は学校へのとらわれから解放されるとともに二次的問題は消え、その後は家庭・地域を拠点に学びと生活を行い、学校へは選択登校となった。

一方、ホームスクールそれ自体については、親と学校教師では大きな見解の相違があり、新たな難しい問題を孕むことになった。本校の先生方は、学

校教師としての責務と情熱をもって、子ども達のことを本当に親身に考え、対応されていた。母親はそのことは十分に分かりつつも、やはり教育観や子ども観の隔たりを容易には埋められなかった。

そこで、親の見解と教師側の見解の主な相違点を整理した(表1)。少なくともこれらの相違点は、どのホームスクール事例にも起き得る問題といえよう。

表1. 親の見解と教師側の見解の主な相違点

	親の見解	教師側の見解
登校	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの選択による。 ・学校だけが子どもの教育の場ではない。 ・学校は我慢して行く所ではない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・規則正しく登校すべきだ。 ・来たり来なかったりでは皆に迷惑をかけることがある。 ・親の身勝手による教育放棄ではないか。
性格・社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが今したいことを自分で選んで、自由に活動することを重視する。 ・放任や強制はなく、子どもの要求に応じて丁寧に親がかかわっている。 ・学校よりも多様な人間関係があって、むしろ現実に近い社会性が育つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わがままになる、我慢することを覚えない。 ・子どもに適切な選択ができるのか(子どもは楽な方へ流れたり、誤った選択をするのでは)。 ・社会性が身に付かない。
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもなりの試行錯誤と発見のプロセスを重視する。 ・大人は子どもに教えすぎないように注意すべきだ。 ・価値観や思想を伝えていくことは必要だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な学習が必要。 ・子ども自身の好き嫌いではなく、その時期にやらなければならない学習内容がある。

4 日本におけるホームスクールの教育臨床的課題

最後に、わが国でホームスクールを実践する際に、今後の検討が必要とされる教育臨床的課題について述べることにする。今後、いずれの課題も実証

的研究に裏付けられなければならない。ところが、これまでの教育心理学関連の研究デザインは学校教育を前提とするものが多く、研究そのものが暗黙のうちに学校化されていたと言っても過言ではない。このような意味で、ホームスクールに関する研究は新たな研究パラダイムをもたらす可能性がある。

(1) 自己を基点とした生き方の追求

本論文の事例は、長期欠席を契機としてホームスクールに移行する中で、親子の学校絶対視は弱まり、そして学校は選択肢の一つに過ぎないものとなり、家庭や地域を拠点に子どもの学びと生活を行うようになっていった。

ところで、筆者が関与した不登校事例では通常、親は「何とか学校に行ってくれないか」と思い悩み、子どもを責め否定し、また「学校に行かないのに外出させるのは良くない」といって結果的に子どもの引きこもりを助長する対応がされていた。また子どもの学習については、「家で勉強（教科学習）でもやってくれたらいいのに」、「塾や家庭教師に頼もうか」と言って、子どもの学びに親として直接関わろうとする姿勢はあまり見られなかった。さらに、学校側や教師の対応に不満をもつことが多く、これが学校への依頼心からくる過剰期待と過剰批判であるとの認識はうすかった。そこで、ホームスクールを示しても、「学校に行かないなんて、そこまでは割り切れない」と、学校への囚われから逃れられなかった。

実は、当事者の親子が学校への囚われから抜け出すことができない間は、不登校に随伴するいわゆる二次的問題（自己否定感等）も解消できないし、再登校の可能性も低いのである。言い換えれば、「学校に行かなければならない」という強迫性を軽減することが、再登校を含めた次なる展開をもたらすのである。具体例として、学校への囚われから免れた人々が希望をもって歩む姿が、「笑う不登校」編集委員会編（1999）には多数示されている。

今日、不登校及び高校中途退学の生徒数が増大しつつあるが、それでもなお従来の学校教育の枠組だけで全ての事例に対応するのは困難なのではなかろうか。それは何も学校教育を全面否定しているわけではなく、従来の学校

は選択肢の一つに過ぎないというオルタナティブ教育の必要性を提言しているのである。学校教育、家庭、地域、民間教育の各々が為すべきことを峻別し、それぞれが排他的ではない独自性をもちつつ、また相互依存あるいは協調・協力しながら、オルタナティブ教育が産み出されていく必要があるだろう。

そして、従来型の学校教育、様々なタイプの新しい認可学校、フリースクール、ホームスクール等、子どもの教育の場は多様化してくる。その際に、学校に行けないから他の所に通うというあり方は「第二の学校化現象」を引き起こすかもしれない。大事なことは、どこに通うかではなくて、ホームスクールの思想が示唆するように、「自己を基点とした生き方の追求」である。

(2) 学習の問題

ホームスクールの子どもは低学力ではないかと危惧されることがあるが、必ずしもそうとは言えない。アメリカではホームスクールの子どもが、有名難関大学に進学した例や、学力を競うコンテストで優勝した例がある。ただし、これらは特異例であり、またホームスクールはある種の英才教育の側面もあることを念頭におかねばならない。ところが、ある州の基礎学力テストでホームスクールの子どもの方が平均得点が有意に高かったという結果は説得力をもっている。

では、なぜこうした結果が得られたのだろうか。親の要因について検討した調査では、親の学歴と子どもの成績には相関がみられない、親の教師資格の有無による子どもの成績に差はみられない、という結果が得られた。それでは、いったい何が重要な要因なのだろうか。

実証的研究は今後に待たなければならないが、筆者は以下のように分析する。ホームスクールには家族によって様々なスタイルがあるが、そこに共通するのは、決められた時間に、決められた場所で、決められた内容を、決められた方法で学習するのではなく、こうした時間、場所、内容、方法において「子どもの自己選択」が重視されている点である。もう一つは、「学びの動

機づけ」を重視する点である。子どもは、親や他の大人によって自己のニーズが的確に捉えられ適切に応じられる中で、動機づけを高めていくのである。これは、子どもの身近にいて真剣に子どもの教育を考えている親だからこそできることかもしれない。

ところで、わが国の場合学校に行かない子ども達の低学力が問題となっているが、これはホームスクールの問題というよりも、不登校による二次的問題の一つとみなすことができる。不登校の子どもも多くは、教科書、問題集、机など学校的色彩のあるものを回避したり、大人側の教えようという態度を拒否する傾向がある。例をあげると、中学生の間は学校の勉強を一切しなかったのに、卒業と同時に教科書を開いて勉強を始めたという例が散見される。学校への囚われから解放されたときから、学習が再開されるのである。もし、もっと早くそこから解放されていれば、子ども達は教科学習を含めた自由な学びを積極的にすすめていたはずに違いない。

学校という場は、教科の専門家がいて、カリキュラムが整い、施設・設備が充実している等、ある意味では学びの場としては大変に機能的、効率的である。しかし今日では、学習リソースは地域に遍在しており、学校だけが学びの場ではないことは確かである。つまり、社会のあらゆる施設や人々が子どもの学びに利用可能であり、学びの場が学校でなければならない理由は薄れつつあるといえよう。

ただし学習内容においては、私事性ととともに公共性があってこれら両者のバランスが問題になってくるが、それには次に述べる社会性の獲得の問題が密接にかかわっている。

(3) 社会性の獲得に関する問題

ホームスクールの子どもは、常識が欠落したり、わがまま勝手になったり、怠惰な生活を送ったりする等の問題を起すのではないかと、という批判がある。これへの反論として、それは学校側の視点からの社会性の問題に過ぎないのであって、ホームスクールの子どもの方が年齢・立場の違う多様な人々

との交流が多いことから現実社会を反映した社会性が育つという意見が出されることがある。端的にいえば、学校側の意味する社会性への疑問視である。そして、むしろ学校の方が人々の交流において形式的、画一的、閉鎖的であるため社会性の獲得に問題があるというのである。したがって、「ホームスクール就学者同士の交流、協会を中心とする社会的活動、兄弟姉妹のなかでの生活力の方が、現在の公立学校より、はるかによき市民としての社会性を培うことができる」(本図、1995)とされている。

ただし、わが国の場合ホームスクールの家族は全く少ないため、相互交流の機会はなかなか得られない。また、学校に行かないで他の所に出かけることが奇異の眼でみられることから自由に外出できないという問題がある。

その他、社会性の獲得と関係して、所属アイデンティティ、家族の密着関係、等についてさらに検討が必要である。

おわりに

学校依存症とでも評すべき事態が進行しつつある。今日、核家族化、少子化、地域の仲間遊びの喪失によって、子ども達の対人関係の練習の場は極端に少なくなった。こうした欠落の補完が今や学校教育に求められているが、果たして人々はどこまで学校に取り込まれていくのであろうか。このような点では、学校教育に過剰依存しないで主体性をもって子どもの教育に取り組むホームスクールは高く評価されて当然であろう。

ホームスクールは、家族の「きずな」と地域の人々の「つながり」を深めるものであり、単に学校教育へのアンチテーゼとして見てはならない。将来のホームスクールの展開は、教育分野のみならず社会の新たな価値観形成に貢献する可能性を含んでいる。

最後に、事例の提示にご理解とご協力をいただいた家族と学校の先生方に感謝を申し上げたい。

文 献

- Education Otherwise 1996 School is not compulsory: The essential introduction to home-based education (相沢恭子・石井小夜子・鳥居祥子・平山由美子訳 1997 学校は義務じゃない—イギリスのホーム・エデュケーション実践の手引き 明石書店)
- 江澤和雄 1997 アメリカのホームスクールをめぐる動き 青少年問題, 44 (2), 30—33.
- 泰 明夫 1997 アメリカにおけるホームスクール運動の現状 学校経営, 42 (1), 90—96.
- 泰 明夫 1999 アメリカのホームスクールの現状と課題 教育と情報, 490, 48—51.
- Holt, J 1981 Teach Your Own—A Hopefull Path for Education (大沼安史訳 1984 なんで学校へやるの—アメリカのホームスクーリング運動 一光社)
- Holt, J 1982 How Children Fail (大沼安史訳 1987 教室の戦略—子どもたちはどうして落ちこぼれるか 一光社)
- Holt, J 1983 How Children Learn (吉柳克彦訳 1987 学習の戦略—子どもたちはいかに学ぶか 一光社)
- 久貝登美子 1996 ホームスクーリング・ネットワーク 月刊むすぶ, 311, 11—15.
- 久貝登美子 1998 ホームスクール 谷村覚(研究代表者)生涯学習社会における学校教育と学校外教育の役割と連携 平成7・8年度科学研究費補助金 基盤研究(B)1研究成果報告書, 68—84.
- Mayberry, M., Knowles, J.G., Ray, B. & Marlow, S. 1995 Home Schooling: Parents as Educators. Corwin Press. (泰明夫・山田達雄監訳 1997 ホームスクールの時代—学校に行かない選択: アメリカの実践 東信堂)
- 本図愛実 1995 ホームスクールによる学校教育への問題提起 (現代アメリカ教育研究会編 1995 学校と社会との連携を求めるアメリカの挑戦) 教

育開発研究所, 133—158.

大久保卓治 1998 ホームスクールの権利について—C.J.Klicka “The Right to HOME SCHOOL”を手がかりとして— 関西大学法学論集, 47, 978—1023.

武内 清 1997 学校のあり方を考える—ホームスクールから 教育展望, 43(2), 28—37.

東京シュレー編 1996 ホームエデュケーションのすすめ 教育史料出版会
「笑う不登校」編集委員会編 1999 笑う不登校 教育史料出版会